激走金田路

藩の憂い絶つ秘策決行 幕府軍撤退後も防戦続く

敵占領下にある小倉城地下から藩主遺体を決死の作戦で搬出。

海戦で火ぶたを切った小倉口での戦い。九州諸藩を総指揮するはずの幕府老中が、将軍・家茂の死を聞き、幕府艦船「富士山丸」で戦線を離脱。諸藩は随時撤兵し、海上戦力も低下した。小倉藩は孤立し、幕府が停戦してもなお長州軍の猛攻を防戦した。［資料:征長戦絵巻／小川忠文氏所有］

郡内死守した名将 島村志津摩

14代将軍・徳川家茂のあとを継いだ慶喜は、当初、長州征討に自ら参戦する意気込みでした。しかし、小倉城炎上の惨敗を聞くと考えを変え、停戦します。慶応2年（1866）9月から撤兵が始まり、長州征討は幕府軍の敗北に終わりました。

しかし、長州軍と小倉藩との戦いは依然として続きます。小倉藩家老・島村志津摩が激しく応戦しますが、長州軍はじりじりと小倉藩を追いつめ、要衝の平尾台を占拠。10月には田川における最終防衛線、金辺峠の砦に長州軍の総攻撃がかけられ、田川郡内は騒然としました。ここでも島村志津摩が防戦に努め、死守しますが、12月に長州藩の止戦条件を受諾。明けて慶応3年（1867）1月、正式に長州藩と止戦協定を結びました。

こうして、朝廷から長州藩が許されるまでの間、担保として企救郡を長州藩が保障占領するという結果でおさまり、第二次長州戦争の小倉戦は、ようやく終結を迎えたのです。

小倉城下をはじめ、田川郡の郷土を巻き込んだこの戦いを期に、徳川幕府の命運は風前の灯火となっていきました…。

【島村志津摩】小倉戦で第一軍を指揮。田川の防戦では金辺峠を最終防衛線と定めて山岳ゲリラ戦を展開。農兵も動員して郷土を死守した。左絵の中央が志津摩、右写真は金辺峠の頌徳碑。［絵画／小川忠文氏所有］

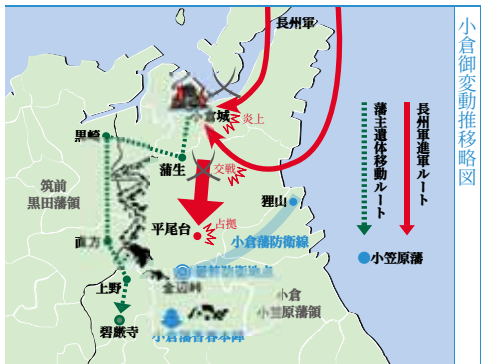
夜陰に乗じた極秘策 目指すは金田碧厳寺

長州藩との戦いの中、小倉藩にはずっと気がかりなことがありました。小倉城を焼き、撤退する際に、持ち運ぶいとまがなかった藩主・小笠原忠幹の遺体です。そこで、小倉藩は、慶応2年11月に、ある密かな作戦を実行します。死を公表せず、小倉城地下に隠したままの藩主遺体を長州軍の占領下から運び出すという、イチかバチかの行動に出たのです。失敗すれば藩の面目はつぶれ、幕府からも処断される恐れさえありました。

その秘策は11月3日に企救郡菜園村の大庄屋・中村平次郎と千石屋の大石弥太郎、香春の森本滝蔵らが練り、26日の夜陰に乗じて決行されます。立町の大工・吉衛門親子らによる決死のゲリラ作戦が行動に移されました。

敵中の小倉城で発掘され、長持におさめられた遺体は、まず蒲生（小倉南区）に運び出されます。そして、敵陣を避けるように黒崎方面へと向かい、直方、上野を経由して、金田へと至りました。策は無事成功し、忠幹の遺体を碧厳寺（福智町金田）の清石山山頂付近に密葬。戦火を脱した藩主遺体が、この地にたどり着きました。

【小笠原忠幹】父の跡を継いで播磨安志藩主となったのち、本家9代藩主となる。第二次長州戦争の前年に死去した。（画像／福聚寺所有／北九州市立自然史・歴史博物館提供）



福聚寺と碧厳寺

多くの寺宝が存在する小笠原家の菩提寺、広寿山福聚寺。

福聚寺の開山・即非。小倉城下に中国様式の黄檗文化も広めた。（画像／金田町史）

藩主・忠幹の遺体が運び込まれた金田の碧厳寺は、小笠原家の歴代藩主がねむる広寿山福聚寺（北九州市小倉北区）と、たいへんゆかりの深い寺でした。ともに禅宗の黄檗宗で、碧厳寺は福聚寺の2代目住職・法雲が開山となっています。

福聚寺は、京都万福寺を開いた名僧・隠元の高弟・即非を初代小倉小笠原藩主・忠真が招いて開かれました。法雲は、福聚寺の開山・即非の片腕といわれるほどの高弟でした。

碧厳寺は、福聚寺3代目住職・愚禅の弟子となった守靖が、法雲を招請して開山とし、金田の地に創始されました。「清石山碧厳寺」の号は、このとき愚禅が与えています。

福聚寺は、第二次長州戦争で伽藍の大部分を喪失。長州軍に占拠され、戦火にみまわれました。境内には歴代藩主の墓廟をはじめ、島村志津摩など多くの藩士の墓があります。

東金田の中央に位置し、黄色い柱が特徴の清石山碧厳寺。